

おお勝利

1

平成 26 年度山東サッカー部報第 13 号 (7 月 14 日)

サッカー部保護者の皆様、OB・OGの皆様、日頃より本校サッカー部の活動にご理解とご協力を賜りまして、感謝申し上げます。

連続のY2B山商戦 新チーム初陣飾れず

7 月 13 日 (日) Y2B 第 8 節山形商業戦が山形明正 G で行われました。山東は前節で 3 年生が引退し、**この節から新チーム (新人チーム)** で臨むことになる。毎年ですが、この時期は楽しみ 2 割、不安 8 割。何より、この新人チーム、**総勢で選手 21 人しかいない**ため、ほぼ全員が登録メンバー。怪我人がいるのと、出場予定ではない選手を登録させない方針により、結局数名が応援に回り²、薄い層は更に薄く。山東ベンチに入ったサブ選手は 4 名。しかも、その 4 名は GK が 1 名、故障 1 名、故障気味 1 名であり、FP (Field Player) の実質交代枠は 1 名と厳しい。3 年生がいたチームにおいても半分は 1・2 年生でしたから、「新チームになっても楽しみだな」と楽観しておりましたが、いざ新チームになると、「これで大丈夫だろうか」とあたふた。ただ、3 年生の引退ミーティングにても、3 年生から「絶対に今期 Y1 に昇格してほしい」と「遺言」されているものだから、諦めは禁物³。相手は先週 3 年生チームでも負けた山商ですが、勝ち点 3 をめざして、試合に臨みました。

清野 OB 会会長、後藤報道局長、そして 3 年生の保護者を含む多数の保護者の方々が応援にいらっしゃる。**チーム力に差があるこの対戦のコンセプトは、山商に押し込まれても焦**

¹ 以前の部報にて今年、3 年生のあだ名の由来にふれましたので、**部報名の由来**もお話します (過去 2、3 度実施済み)。山東の応援歌 1 番は山東生なら知らない人がいない「おお勝利」です。応援歌 2 番は「骨をつらぬく」、3 番は「鉄壁固く」です。30 代後半以上の OB・OG は、入学間もなく厳しい応援歌指導を経験したでしょうから、題名を聞いただけで「骨を～つらぬく～烈風の～白髭 (はくせん) 飛ばす三冬 (さんとう) に～南を回る算なりて・・・」、「鉄壁固く～計を～練り～渾身の意気～物 (も～の～) 凄く～・・・」という歌詞が思い出されるかと思います (若手 OB・OG の高校生時代は応援歌指導が軟弱になったので覚えている人が少ない、現役生に至っては時間の関係で 2 番 3 番がそもそも指導されていない)。ちなみに、今野が母校山東に赴任してから、高校当時は気にならなかった (わからない言葉を丸暗記していた) 応援歌「骨をつらぬく」冒頭の意味について恩師の 1 人である O 十郎先生にお聞きしたところ、白髭 (はくせん) とは白い髭 (ひげ) のことで、「雪が白く長い髭のように振りつけている冬期 (1 月+2 月+3 月=三冬) に、南面するリーダー (天子南面す) が必勝の計画を思いつく」という意だと教えて頂きました。話が長くなりましたが、この部報名は応援歌 1 番にちなんで付けられました。ただ、発行当初はそのまま「おお勝利」でしたが、応援団幹部会の團報名と同名だったため、変更を要求され、「大」をつけて現在に至っています。

² 県リーグの登録は、毎試合、試合前に 20 名行きます。そのうちから、5 名交代できます (ということは、サブメンバー 9 名のうち 5 名出られるということ)。

³ とある 3 年生から、「部報前号で、山商戦前半に警告なしの F K をドリブル突破で得たのが後半のそれと同様ムンタリになっていましたが、あれは僕です」との指摘 (怒) を受けました。スマン、レスラー!

らずしっかりブロックを作りカウンターを狙う作戦。前からボール奪取に行かない訳ではないですが、前でボール奪い攻撃につなげる利益よりも、前掛かり過ぎて守備組織が間延びし数的不利になる不利益をより強調いたしました⁴。簡単に言えば、今節、**守備重視の山東**ということ。

試合が始まると、当たり前ですが、山商ペース。**山商の選手は一人ひとりが落ち着いている。**押し込まれている山東は、山東サイドのピッチに選手が多くいるのだから、**一人ひとりが1対1でしっかり対応すれば、そうそう簡単に崩される訳はない**のだが、その話が「たれば」で終わっている⁵。簡単に言えば、いつ失点してもおかしくない立ち上がりを過ごす。そんな中、右MFで先発した1年カズマが相手と交錯しボールとやや離れたところで倒れる。山東ベンチ前でしたが、あまり心配せず眺めていると、なかなか立ち上がらない。そして、立ち上がったと思ったら、そのままピッチの外に出るよう促される。ピッチの外に出る姿を見たら、口から血が出ている。「口を切ったか、すぐ止血して出てもらわないとな・・・名和さんがいらっしゃらない節で困ったな」などと考えていると、「歯が折れてます」とのマネージャーの声。顔をよくよく見ると、前歯がぐらついている。志村顧問に付き添われ、病院直行⁶。そして、前半10分にして早くも、実質交代枠1名の団長ことタクオ投入⁷。「(交代が)1名で足りるかな～、できるだけ先発11人で引っ張って、何かあった時だけその1名使おう(戦術的なメンバー変更はしないようにしよう)」と当初考えておりましたが、早くもその1名を使うことになるうとは。しかし、その団長がやってくれました。

前半29分ムンタリが左サイドを抜け出し、センターリングしたのを逆サイドから詰めた団長がスライディング。ボールは転々とゴール右隅へ。先制点を大劣勢の山東が上げる。だからサッカーは面白いんです。これ、バスケだったとしたら、団長が殊勲の点を上げて、スコアが2対40になるだけです。すなわち、(ハイスコアのバスケと違い) **ロースコアの競技サッカーでは、内容と結果が往々にして一致しないので「まさかの展開」になりやすい。**そして、その後、山商に焦りが見えたか、山東の守備が安定し、山商が攻めあぐむ展開に。得点当初は、「・・・の展開になるとマズイな」とつぶやく齋藤GKコーチに対して、「齋藤さん、大丈夫、心配しても前半のうちに絶対に失点するから」などと良く言えば謙虚に展開を読んでいた顧問も驚くような、前半1対0での折り返し。**顧問の予想を良い意味で裏切る選手の頑張り⁸!**

4 «ボールを奪われたらここまで下がり、そこからボールを奪いに行く»という約束事の下ゲームをするリトリート(退却)作戦を採っていた訳ではありませんが、試合の中で押し込まれ、引き気味になったとしてもそれはそれで良い、とは伝えていました。山東では長年、後方の選手から「行くな(後続が間に合わない)」の声がかからない限り、ピッチの高さにかかわらず前線からボールホルダーにアプローチせよと指導しています(すなわち、ボールの取り所はこのエリアだから、ボールがここを通過したらアプローチせよというような、ボールの取り所を明確化した指導をしていません)が、**この山商戦では、後方の選手から「行け」の声がかからない限りボールホルダーにアプローチするなど指示しました。**

5 勝負の世界における禁句。「あいつがいたら・・・」とか「あそこでこうなっていれば・・・」と勝手なことを言って現実逃避する発想のこと。

6 すぐ治療してもらいましたが、結構深く口の中を切っており、縫ってもらい、歯も固定してもらいました。歯がちゃんとくっつけばいいのですが・・・。

7 「安田大サ○カス団」の団長に似ていることから、つけられたあだ名。

8 思えば、**守備の安定していた前半の後半の守備ラインは、それ以外の時間よりも高かった。**ペナルテ

しかし、後半に入ると、一旦気持ちをリセットし集中力を高めた山商の猛攻を堪え切れない。早々に攻め込まれ、左からセンターリングを許す。それをクリアミス（空振り！）して右まで流すと、そこから右サイドを崩され、ニアサイドのネットを揺らされる。前半 1 分の同点劇。山東のアップセットを期待した人々からは、「あ～やっぱりか～それにしてもあっけなさ過ぎる」とのため息が漏れる。そして、すぐ前半 3 分に同じく左サイドから攻め込まれ、ゴール前中央で奪ったボールをなぜか山東の選手がドリブルし、すぐ奪われ、そこから数プレー後逆転弾を浴びる。**前半 3 分間で 2 失点**。前半の頑張りがあるだけに、実力差を反映する失点にも「もったいない」という気持ちがどうしても芽生える。そして、これから何失点するか、不安な気持ちに駆られる。人がいっぱいいても守れないのだから、どうしようもない。その後は、カツミのドリブルシュートや、サンペスのドリブルシュート、ムントリの詰めなど散発的に山商ゴールに迫るも、**圧倒的にボールをつながれ山商の攻撃練習のような後半の展開**。山商のフィニッシュ精度に助けられ、その後は失点しませんでした。が、「その後はなぜか失点しませんでした」という表現が合っている。要は、5 失点くらいしてもおかしくない展開でした。まず、**1 対 1 でボールを奪う力（守備力）が圧倒的に欠けている**。これではドリブルで簡単に 2、3 人とはがされてしまう。守備ラインを非現実的なほど高くせず低い位置で守備者同士の距離を短くして（組織的にして）守るということは、相手の攻撃を自ゴール前に呼び込むことになるのだから、ゴール前の粘りが効かなければ作戦が仇となる。かと言って、守備者の意識が前に前に行ったとしても 1 対 1 でボールを奪うことができなければ、単にはがされに行っているだけになる。「1 対 1 で守れないのだったら 2 対 1 にして奪えばいいのではないか」と考える読者諸賢がいらっしゃるかと思いますが、2 対 1 で奪うためには、最初の奪い手（1st Defender）が厳しく 1 対 1 で迫り、悪くても後方のサポート役（2nd Defender）の所で奪えるようにしなくてはならない。結局どうしたって 1 対 1 の力が問われる。また、自陣で守備の枚数を増やし守備側が数的優位をめざしても、攻撃側が相手陣に深く攻め込む人数を増やせばその優位は実現されない。繰り返しますが、結局どうしたって 1 対 1 の力が問われる。そして攻撃においても、やはり 1 対 1 の力にふれざるを得ない。**1 対 1 で負けない自信が攻撃時にない⁹ものだから、相手が寄ってくるとそれだけで焦り¹⁰、つながらないパスをしてしまう（早くボールを放そうとして訳のわからないところに蹴りだしてしまう）**。何もドリブルでこねくり回せばよいと言っているわけではないのですが、**落ち着きのない選手に良い選手はいません¹¹**。

イエリアから 10m 以上は高かった。それ以外は、ペナルティエリアの中か、高くてもペナルティエリアギリギリまでしか上げられなかった。単純にラインを上げればよい（上げなかった守備陣が悪い）という訳ではなく、それ以外の時間は上げたたくも上げられなかったのでしょうか、**FW・MFのラインの守備が効いていた時間帯が総じて守備が安定していた、というのは、一つ大きな教訓**のように思えます。

⁹ この場合必ずしも 1 対 1 で勝つ（抜く）自信は必要ありません。少なくともボールを奪われない自信さえあれば、相手が寄せてきたところで不必要に焦る心配はなくなります。それゆえに、相手とボールの間に体を入れ続けるスクリーンの技術（しかも両足で保持する技術）がどうしたって不可欠なのです。

¹⁰ ちなみに、焦っている選手はよく相手を観察していないので（よく観察したところでそれに対処すべき術を持たない選手はよく観察しようと思わないので）、相手が余り寄せてきてなくても相手の気配をちょっと感じただけででたらめな所にボールを放してしまいます。

¹¹ ということは、サッカー選手たるもの、焦っていても焦っていないかのように見える（見せる）ようであればなりません。

ともかくも、新チーム初陣の山商戦は1対2の敗戦。良い時間帯もあったし、タツルとシャモジの2CDFとGKサブローの2年生トライアングルは率直によく凌いだ（よい働きをした）と思います。**特に故障を抱えつつ頑張ったシャモジのフレーには、時間を経るごとに安定感を感じました。**そう、スライディングシュートによる団長のいきなりの得点とか、明るい材料はありました！ 応援に回った選手諸君も、少ない人数ながら、出場選手を鼓舞し続けてくれました！ **何と云ってもこれは初陣です。「新チームは山商相手によく粘り頑張りました」という前向きな言葉で締めたいと思います。**

応援ありがとうございました。次節もよろしくお願い致します。

7月21日(月) Y2B第9節 山形中央B戦 15:00~ @山形明正G

夏合宿宿泊先

月山合宿 8月3日(日)~8月5日(火)の2泊3日

宿泊先: 田舎料理の店えびすや 0237-75-2021 山形県西村山郡西川町月山志津温泉

苗場遠征 8月7日(木)~10日(日)の3泊4日

宿泊先: ペンションハイジ 025-789-2370 新潟県南魚沼郡湯沢町三国 177-2